

マレーシア・ドゥスン族社会における若年層の飲酒嗜好

三浦 哲也¹⁾

The Actual Conditions, Preferences and Demand of the Young Generation's Drinking in Dusun Society, Sabah, Malaysia

Tetsuya Miura

Abstract

The Dusun people at the northern mountainous area in Borneo has their unique drinking culture. However, this culture is now changing due to the effects of economic development and globalization. The preferences and demand of their alcoholic drinks are expected to change dramatically in the near future.

This article aims to examine the actual condition of young generation's drinking and the direction of changes in preference, especially based on a survey of young people who have experience living in urban area.

Key words: Malaysia, indigenous, drinking of young people, traditional liquor, acculturation

キーワード：マレーシア，先住民，若年者の飲酒，伝統酒，文化変容

1. はじめに

本稿は、東マレーシアの少数民族であるドゥスン族社会の飲酒文化について、特に若年層に注目し、飲酒の傾向および嗜好の変化について、現地調査で得られた資料を基に考察することを目的としている。

マレーシアは、マレー半島およびボルネオ島北部を領域とする、人口約3,200万人の国である。その人口のおよそ6割がイスラーム教徒であるマレー系住民で、残りの約3割を華人系住民、1割をインド系住民が占めている。この3大民族がそれぞれの生活習慣と居住形態を割拠的に保持していることから、マレーシアは一般に複合民族国家として知られている。それはつまり、各民族がその文化的・宗教的規範をそれぞれに維持している

ということであり、マレーシアにおいては各民族それぞれの食文化を含めた生活文化が、個別に併存しているということを意味する。

さらに、この3大民族に加えて数多くの先住民民族や、近年特に増加している近隣諸国からの移民・労働者などの存在が、マレーシアの文化と社会をより多彩に、かつ複雑にしている。

一方で、マレーシアでは憲法で信教の自由が保障されているが、イスラーム教を国教と定めている。地上波テレビ放送において酒類のCMは禁止であり、イスラーム教徒が多い地域での酒類の小売りが事実上禁止されているなど、酒類販売に対する規制は多い。とはいえ、イスラーム教徒を除いた国民の約半数弱がアルコール飲用層である。近年は、高い経済成長や若者のライフスタイルの変化を背景として、マレーシアの酒類市場は、

1) 育英短期大学現代コミュニケーション学科

年率数%ずつ成長している（三浦 2017b）。

2. 研究対象と調査について

2-1 ドゥスン族について

本研究の対象であるドゥスン（Dusuni）族は、マレーシア・サバ州に居住する先住民族である。サバ州はボルネオ島の北部に位置し、マレーシアの首都クアラルンプールから州都コタキナバルへは、ジェット機で2時間余である（図1）。マレーシアの政治経済の中心が、首都クアラルンプールを含むマレー半島中部であり、そこから地理的に隔絶したサバ州は、マレーシアの中でも辺縁部に位置づけられていると言える。

ドゥスン族は、そのサバ州の西部の山間部に居住する人々である。伝統的には水田および焼畑での稲作を主たる生業とし、精霊に対する信仰を保持してきた。現在、「ドゥスン族」は、公的機関や人口統計、そして特に政治的な場面においては、サバ州西部沿岸地域に居住する「カダザン族（Kadazan）」を称する人々を始めとする複数の民

族集団と併せて「カダザンドゥスン（Kadazandusun）族」と集合的に称されるのが一般的である¹。

2010年の統計では、サバ州の人口約320万人のうち、「カダザンドゥスン族」は約57万人で約18%を占め、サバ州における最大の民族集団である。マレー系（5%）、華人系（9%）インド系（0.2%）は少数派であり、カダザンドゥスン族を中心とする先住民が56%を占めている（Department of Statistics, Malaysia, Sabah 2015）。マレー半島部のようなマレー系／華人系／インド系の人々による3大民族の構図はサバ州には当てはまらないのである。

サバ州では最大の人口を有する民族である「カダザンドゥスン族」ではあるが、マレーシアという国家レベルでは、人口比わずか0.2%の少数民族である。また、マレーシアの国語がマレーシア語であるのに対し、サバ州の先住民の多くがそれぞれ固有の言語を有している。イスラーム教国マレーシアの中では、キリスト教徒を多く含む「カダザンドゥスン族」は宗教的にも少数派である。



図1 東南アジアにおけるサバ州の位置

このように、ドゥスン族を含む「カダザンドゥスン族」の人びと人々は、地理的にも、文化的にも、宗教的にも、マレーシアの中においては周辺の存在であると言える。

2-2 調査について

筆者は、1998年以降、サバ州の西部内陸地域に位置するタンブナン (Tambunan) 郡のドゥスン族の村落 KN 村 (仮称) において、文化人類学的調査を継続的に実施してきた。本稿で提示する資料の多くは、2016年の東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄附講座食文化共同研究による KN 村での現地調査、および 2017年の補充調査で得られたものである。

3. ドゥスン族社会における酒

3-1 伝統酒トーミス

ボルネオ島に居住する先住民の社会の多くは、伝統的に自ら酒を醸し、飲酒する文化を有している。ドゥスン族の社会にも、独特の飲酒文化が伝統的に存在してきた (三浦 2008, 2012)。

ドゥスン族が醸す伝統的な酒は、彼らの言葉でトーミス (*tohmis*) と総称され、特に結婚式、収穫祭などの儀礼の際には無くてはならない酒である。トーミスは、うるち米もしくはキャッサバ芋を加熱調理したものを、カビ麴により固体発酵させた酒である。

酒の醸造においては、原料の糖化とアルコール発酵という二つの工程が必要であるが、固体発酵ではその二つの工程を、原料が固体状態のまま同時に行うものである。ドゥスン族のトーミスの場合、米もしくはキャッサバ芋の澱粉質が酵素によって糖化され、さらにその糖が酵母によってアルコールに変化する工程が、同一の容器 (壺やバケツなど) 内で行われる。

固体発酵した酒であるから、飲む際には何らかの形で水を加えて、味とアルコール分とを水に溶

出させてから飲むことになる。なお、トーミスは出来具合がその時々で異なることから、その味は *ohmis* (あまい) / *onsom* (すっぱい) / *opeet* (にがい) の3つの味覚の組み合わせによって説明・評価される。

伝統酒トーミスの飲み方には複数あり、さまざまな道具を用いる。飲み方、トーミスの様態、用いる道具によって、様々に呼び分けられる。最も伝統的なトーミスの飲み方は、シオポン (*siopong*; 以後壺酒²と訳す、以下同様) という形式で、壺に竹のストローを用いる方法である。

トーミスに水を含ませ、細いホースを用いてサイフォンの原理で抽出したりヒン (*lihin*) や、トーミスを布袋に入れてバケツの水の中で濾し出して作るリヌタウ (*linutau*) を、プラスチック製コップに注いで飲むという、ティノギエ (*tinogie*; コップ酒) という形式もある。

また、2008年頃からは、清涼飲料水やミネラルウォーターのペットボトルの上部を切り取った容器の中でトーミスを発酵させ、これにプラスチックストローを差し入れて、めいめいが手に持って飲む、というトンポン (*tongpong*; PET 酒) という形式が見られるようになった。

近年では、後述するように安価で手に入るようになった缶ビールなどの工業製酒類も飲まれるようになったが、儀式・儀礼の場で供される酒は、基本的には伝統酒トーミスであるべきだと多くの人々が考へており、結婚式や葬式などでは、様々な形式でトーミスが飲まれているのである。

3-2 工業製酒類の受容

主に自家消費を目的に製造される伝統的なトーミスに対して、工業的に製造された各種の酒類が KN 村に本格的に普及したのはかなり遅く、2000年代以降のことである。

KN 村はタンブナン郡の中心市街地から 20km ほど離れた山間部に位置するが、1991年に自動車道路が開通するまでは市街地へのアクセスが非

常に悪く、それは同時に工業製品へのアクセスも限定的だったことを意味する。1991年の自動車道路開通以降は、さまざまな工業製品が村落に流入するようになり、生活そのものだけでなく、村人の身体感覚にまで大きな影響を与えた（三浦 2011）。しかし、工業製酒類が村落内で飲まれることは極めてまれであった。

2000年代後半以降、主に商品作物栽培でにわか成功した高所得者層から缶ビールの飲用が普及しはじめ、2013年ごろには一般化した。それまでは村落内での共同労働の後に振る舞われる酒はトームスのみだったが、2013年以降は缶ビールもあわせて振る舞われるようになった。また、葬式や結婚式といった儀礼において振る舞われる酒は、かつてはトームスのみであったが、近年はビールのみならずウィスキーやワインといった工業製酒類も供されるようになってきている。

KN村においては、最近10年ほどの間に缶ビールを主とする工業製酒類が急速に受容されたと言える。この地域の近隣の山間部の村落もほぼ同様と言えるようで、タンブナン市街地のある華人商店³での2015年の密輸ビールの販売量は、月ごとにやや大きな変動はあるものの、2010年当時の販売量の3~5倍になっている。

当該地域の人びとの酒に対する価値観と行動は、現在まさに大きく変容しようとしているのである。

3-3 工業製酒類への嗜好

KN村のドゥスン族の人々が、急速に普及した工業製酒類に対してどのような嗜好を持っているのかを把握するため、2016年2月に質問用紙に基づく聞き取り調査をKN村とその隣接村の男女50名を対象として実施した。調査対象の内訳は、男性26名・女性24名で、年齢は18~70歳（平均41.06歳）であった⁴。

その結果はすでに別稿にて概略を報告しているが（三浦 2017b）、KN村では、多くの者が最も

好む酒をトームスであるとしながらも、すべての者がビールをはじめとする工業製酒類を飲む経験を有しており、その中から、好みの酒類、好みの銘柄を明確に認識していることが明らかになった。また、伝統酒トームスの味は *ohmis*（あまい）／*onsom*（すっぱい）／*opeet*（にがい）の3つの味覚の組み合わせによって説明・評価されるが、ビールに対しても同じような味覚の基準で個人の嗜好が語られ、銘柄に対する評価をしていることも分かった。

3-4 ドゥスン族のライフコースと飲酒

KN村において、飲酒を経験し、恒常的に酒を飲むようになった年齢を聞き取ったところ、平均で17.5歳（男性16.6歳・女性18.4歳）であった。女性の方が若干遅い傾向が見られるが、若い女性が飲酒することに対して特に規範的な制限が語られることはない。世代別では、29歳以下では17.0歳、30~49歳では17.2歳、50歳以上では18.4歳となり、有意な差があるとはいえ、KN村では男女とも17~18歳ごろから飲酒の習慣を持つようになってきているといえる。

KN村内には1966年から小学校があるが、中等教育（3年もしくは5年）を受けるためには10km程離れた学校へ入学することになる。1991年の自動車道路開通後も、バス等の公共交通機関がなく、通学することはほぼ不可能であるため、中等教育学校へ入学する者は併設の学生寮に入ることになる。1980年代後半以降は、ほぼすべての子どもが中等教育学校に進学し、寮生活を経験している。この中等教育学校在学中（12~17歳）に飲酒を経験している者も多い（18名、36%）が、これは寮生活の中で飲酒をするわけではなく、学校休暇で帰村した際の飲酒である。初めて飲酒した場所を尋ねたところ、大学の学生寮と答えた1名のほかは、自宅・親戚宅・隣人宅・村の集会所、つまり村落内と答えた。また、初めて飲んだ酒の種類は、2名がマントク（*mentok*）と呼ばれる蒸

留酒⁵と答えたほかは、全員がトームスであった。KN村の若者は、村落内で頻繁に開かれている酒宴において、家族や知人に囲まれながら初めてトームスを飲む、というのが一般的であることが分かる。

近年では、中等教育学校を3年もしくは5年で卒業した者たちは、その後、大学へ進学するわずかな例外を除き、男女を問わずほぼすべてが首都コタキナバルや、サバ州内陸西部の中心都市ケニングアウ (Keningau) などの都市で職に就く。専門学校等を経由するケースもあるし、サバ州内にとどまらず、マレーシア半島部や隣国シンガポールで仕事を得る者もある。一方で、短期間の仕事を転々としながら、その合間は帰村して農作業を手伝う者もある。そして、婚約や結婚、親からの土地の生前分与、あるいは親の死亡などを契機として帰村し、村落での生活に復帰するケースが多い。

現在50歳代以上の世代においては、男性が村外に出て就業するのは主として婚資を蓄えるためであった。かつてはスイギュウやブタ、米や先祖伝来の宝物が婚資として贈与されていたが、1960年代以降は貨幣経済の浸透が本格化し、徐々に現金に置き換わった。そのため、若い男性は現金を求めて都市に中長期の出稼ぎに行くようになった。しかし、十分な婚資を蓄えて帰村して結婚した後も、貨幣経済の進展によって現金の需要は高く、現金の獲得手段が少ない村落生活を一時的に諦め、ふたたび出稼ぎに出る者や、都市に一時移住する家族も多かった。調査対象の50名のうち、都市部での就業・居住歴がなかったのは60歳以上の女性5名だけである。

都市での生活においては、もちろんトームスを自家醸造することも可能ではあるが、伝統的にトームスの醸造は女性の仕事であるとされており、若い男性の单身暮らしでは事実上不可能ということになる。都市生活では、工業製酒類とその情報を工業製酒類がより容易に入手可能であり、また

酒を飲まないイスラーム教徒を含む多様な他民族との人間関係の中で、さまざまなアルコール飲料と接触し、酒についての情報も多く受容する機会がある。前述したように、ビールについてはさまざまなブランドを認識し、その味の違いに対する嗜好を明確に持っている者も多いとからも分かるように、彼らのアルコール飲料体験は多様であり、その需要と嗜好も多様化している (表1, 三浦 2017b)。その一方で、調査対象の50名のうち、最も好きな酒類として35名がトームスをあげており、以下、ビールが11名、ワインが3名、ウィスキーが1名であった。また、結婚式や葬式などの儀礼で供される酒について、ほぼすべての者がトームスが最もふさわしいと回答した。

表1 ビール銘柄に対する認識

銘柄 (原産国)	知名率	経験率
Tiger (シンガポール)	98%	98%
Carlsberg (デンマーク)	83%	80%
Hite (韓国)	73%	68%
Hineken (オランダ)	65%	63%
Guinness (アイルランド)	65%	58%
Bali Hai (インドネシア)	58%	55%
Anchor (シンガポール)	65%	50%
Orangeboom (オランダ)	45%	43%
Skol (デンマーク)	40%	38%
Bintang (インドネシア)	18%	18%
Tsingtao (中国)	20%	18%
Shingha (タイ)	10%	5%
Jaz Beer (マレーシア)	10%	3%
333 (ベトナム)	3%	3%
Asahi (日本)	5%	3%

3-5 トームスへの選好性

若者の多くは就学や就労のために都市部に居住し、そこでさまざまな酒類を経験する。その一方で、葬儀、結婚式で缶ビールを主とする工業製酒類が供されるようになった。加えて、かつて結婚

式は婚家の自宅で行われるのが普通であったが、近年、都市のレストランやホテルを会場として行われることが増えてきた。そのような場所で供される酒は、ビールやワイン、ウィスキーといった酒である。

つまり、ドゥスン族の人々が工業製酒類に接触し消費する場面と機会は急速に増加しているといえる。この傾向は今後さらに強まると予想され、彼らの酒類に対する嗜好と需要はさらに多様化する方向で変化していくものと考えられる。このドゥスン族の酒に対する嗜好と需要の変化の方向性について考察するため、多様な酒類を経験し、またメディアを通じてさまざまな酒の情報に接していると考えられる都市在住経験を持つ若い世代を対象として、飲酒の傾向と嗜好についての補充調査を行った。

4. 都市在住経験を持つ若年層における飲酒

4-1 酒の嗜好

若い世代を対象とする補充調査は、2017年の9月に、前年の本調査で回答を得ていない18歳から29歳の男性10名（平均24.0歳）、女性10名（同23.8歳）の合計20名に対して、個別インタビューによって行った。対象とした20名は、全員がKN村の出身であり、コタキナバル、ケニンガウなどのサバ州内の都市で通算2~9年の在住経験を持ち、2014年以降にKN村に帰村し居住している人たちである⁶。

この20名には酒を好まない者は皆無であり、また酒を飲むようになった年齢は平均17.6歳で、初めて飲んだ酒は全員がトームスである点は、本調査での傾向と変わらなかった。ビールのブランドに対する認識と経験は豊富で、図2で例示した15銘柄のうち、全員が10種類以上を認知しており、また全員が8種類以上を飲んだ経験があった。また、銘柄に対するイメージについては、特に男

性においてHeinekenとCarlsbergに好感を持つ者が多かった。その理由としては、衛星放送で中継を見ることができると欧州のサッカーの大会やチームのスポンサーであることがあげられた。この点は若年層らしい特徴という印象を受ける。

その一方で、最も好きな酒として、20名中16名がトームスをあげ、3名がビール、1名がワインと回答した。トームス以外をあげた4名の理由は以下の通りである。

- ① 「ワインが一番好き。特に白ワイン。でも値段が高くて自分では買えない⁷。かつて恋人だった華人がたまに買ってきてくれて、一緒に飲むことが多かった」(25歳女性)
- ② 「妻がイバン族で、彼女はトームスではなくトゥア(tuak)をつくる⁸。けれども、彼女のトゥアは私には甘すぎて実はあまり好きではない。だから、ケニンガウ在住時はビールを飲むことも多く、いつのまにかビールが一番好きになった」(29歳男性)
- ③ 「コタキナバルは暑いから、仕事から帰ったら冷たいものが飲みたくなる。暑い時に冷えたビールは最高だ」(筆者：リヒンを冷やして飲むのはどうか?)「リヒンは冷蔵庫で冷やすとすごく甘くなる。甘い酒は嫌いだ」(23歳男性)
- ④ 「トームスも嫌いではないが、食事をしながら飲む酒ではない。隣近所や親族たちと一緒に食事を済ませてから、大人数で喋ったり歌ったりしながら、賑やかに飲むのに向いている酒だ。私は、家族だけで静かに食事をしながら、あるいはテレビを見ながらビールを飲むのが好きになった」(28歳女性)

①と②は他民族の恋人や配偶者との関係の中で、③と④は村とは異なるライフスタイルの中で、新しい好みの酒を見いだした事例と言える。

都市在住時に最もよく飲んでいていた酒について尋

ねると、トーマス（5名）、ビール（15名）であった。最近では、コタキナバルやケニンガウでは家内工業的にシオポン（PET酒）を醸造・販売するドゥスン族の「密造酒業者」が見られるようになり、自家醸造しなくとも都市でトーマスを飲むことができるようになってきているという。

その一方で、飲んだことのある酒の種類は豊富で、ほぼ全員がウィスキー、ジン、ウォッカなどの洋酒や、各種のカクテル、中国酒、日本酒、マッコリなど世界の各種の酒を経験していた。近年、特に州都コタキナバルではさまざまな種類のバーや各国料理のレストランが開業しており、そのような場所で各種の酒や料理を楽しむ機会を得ているという。

4-2 酒と人間関係

都市在住時、どのような場所で、どのような人と酒を飲むことが多かったかを尋ねたところ、表2のような結果となった。自宅よりもレストランの利用が多く、また既婚者は家族や同僚と、独身者は友人や恋人と飲酒することが多い傾向があった。

表2 酒を共にする相手と場所

	自宅で	レストランで	バー・ディスコ等で
一人で	1		
家族と	5	4	
同僚と		8	2
友人・恋人と	6	8	6

調査対象20人。最もよくある2パターンを回答

都市在住時の飲酒の頻度については、月平均4.6回（男性5.1回、女性4.1回）で、本調査での結果の7.4回に比べて有意に少なかった。これについては、全員が村での生活に比べて都市では酒を飲む機会が少なかったこととその理由を明確に意識しており、その典型的な語りは次のようなものであった。

- ⑤ 「都市は、近所が知り合いや親戚ばかりの村とは違う。近所の誰かの家に呼ばれて酒を飲む、ということは村では日常茶飯事だが、都市ではまずありえない。仲のよい友人たちと、たまにレストランで食事をする時にビールを飲む程度だった」（26歳女性）
- ⑥ 「職場の同僚とは、よく食事に行ったり、友人たちとカラオケバーに行ったりした。酒を飲める相手と出かけた時だけ、酒を飲む。飲めない人がいる場面では、飲まないようにしていた。職場や友人には、マレー人や、カダザンドゥスン族などのサバ州の先住民でもイスラーム教徒になっている者も多くいた。一緒に出かける人の中にイスラーム教徒が一人でもいれば、食事はハラール⁹の店に行くし、バーには行かない。それで酒が飲めないことを不満に思ったことはない。都市で上手く人付き合いするためには、当然のことだ」（26歳男性）
- ⑦ 「都市では、まわりにはイスラーム教徒も住んでいるし、顔見知りであってもどんな信仰を持っているのか分からない相手もいる。ドゥスン族同士なら、初対面でも一緒にトーマスを飲んで、それをきっかけに友達になれるが、都市ではそうはいかない。相手の宗教を知った上で、さらに好き嫌いや健康のことを含めて、酒が飲める人だと分かってから初めて一緒に酒を飲める。村にいる時に比べると、気を遣う」（23歳男性）
- ⑧ 「職場に、華人の先輩がいた。彼には、いろいろな店に連れて行って貰い、いろいろな酒と一緒に飲んで、楽しかった。しかし、彼が転職していなくなると、他に一緒に飲みに行く人がおらず、酒を飲む機会は激減した」（25歳男性）
- ⑨ 「都市では、すべてのものが高価だ。食べ物も飲み物も、すべて高価だ。酒を飲むのは好きだけれど、都市に住むのは働いて金を稼

いで溜めるためだった。だから、酒を飲むことは希だった」(22歳女性)

都市と村落との間の経済格差や物価の差については、もちろんしばしば語られる(⑨)。村で自家醸造されるトームスが極めて経済的な酒であること、つまりコストパフォーマンスがよい(安く酔えて、しかも美味しい)ことについても、共通して認識されている。

しかしそれ以上に、村落と都市の間には、コミュニティ内での人間関係の深度(⑤)や同質性(⑥⑦)について大きなちがいがあり、それらが酒を飲む環境と関係に影響していると認識しているようだ。また、酒にまつわる文脈において、都市における多民族的・多宗教的な状況については、⑥や⑧のように「飲酒を絶対的禁忌とするイスラーム教徒」と「飲酒に積極的な華人」というある種のステレオタイプをベースにして説明される傾向が見られた。と同時に、都市での個人的な飲酒経験のエピソードが語られる際には、「イスラーム教徒なのに酒好きな友人」や「よく奢ってくれる気前がよすぎる華人」というステレオタイプもまたしばしば登場する。

多様な民族と文化が混住・混在する都市は、その複雑さと面白さ・難しさが顕在化する民族間の「価値観が相克する現場」である。彼らは自らの飲酒体験を通じて、その相克の実践現場としての都市を語っているとも言える。

5. 結びにかえて

直近に一定期間以上の都市在住経験を持つ若年層を対象にした補充調査においては、多様な酒との接触があり、あるいはビール銘柄についての特定の嗜好を持ちながらも、やはりトームスに対する強い選好性が見られた。

個別のインタビューにおいては、ワインの産出国ごとの味の特徴、ウォッカやテキーラといった

強い蒸留酒、リゾートホテルのプールバーで飲んだフルーツが飾られた美しいカクテル、ライターの炎をかざすと火がつく中国酒、あるいは筆者が普段飲んでいる日本酒や焼酎についてなど、さまざまな酒についての話題が飛び交った。多くの者が、いろいろな酒に強い関心を持ち、さまざまな情報も持っている。

この補充調査の対象とした世代(1988~1999年生まれ)は、KN村での1991年の自動車道路開通による多様な物質文化の流入の影響と恩恵を子どもの時から受けている世代である。2006年には電力供給が始まり、テレビやDVDなどを通じて多様な情報にも接しながら成長した世代でもある。そして都市では、1990年代以降の経済成長とグローバル化の進展とICT技術の普及を受けて、職場や日常生活において多様な他民族だけでなく外国人や外国文化とも多く接点を持つ状況が展開されている。

そのような民族と文化が混住・混在し、情報化する都市生活の中で、ドゥスン族の若年層は、飲酒を禁忌とするイスラーム教徒をはじめとする他宗教、他民族と上手に距離感を保ちながらも、多様な酒を楽しんでいることが分かった。

しかしながらその一方で、ドゥスン族の伝統的な酒であるトームスを好む傾向が強いことは、都市在住経験のある若年層でも変わらなかった。ドゥスン族社会のこの若い世代において、外来の生活文化を柔軟に取り入れていく傾向はより強くなっていくはずであるが、その意味では現時点において、今後のドゥスン族の酒の嗜好や需要がどう変化するかという方向性は、はっきりと指摘することはできない。

その一方で、マレーシア連邦結成時以来、連邦政府に対して、「サバ州人」あるいは「カダザンドゥスン族」としてのアイデンティティを強化して、文化的独自性と政治的独立性を保持しようとするナショナリズムの運動が存在する(山本 2006)。このナショナリズム運動は、連邦政府

が複合民族国家から脱皮し、「マレーシア民族」創出による新たな国民統合を図っている現在も、形を変えながら続いている。その文脈の中でトームスはカダザンドゥスン族あるいは非ムスリムのサバ先住民の独自文化として、「タパイ」という一般名称を用いてしばしば強調される。例えば、州政府イベントとしての「収穫祭」におけるトームスのコンテストは、政党の地方支部や、村々での各種パーティなどで模倣され、この発酵酒を醸し飲むことがカダザンドゥスン族の特色ある伝統文化であることを常に再確認、再認識する機会になっている。トームスが、カダザンドゥスン族の、あるいはサバ州先住民のいわばエスニックマーカ―として、その伝統文化の象徴として表象されていると理解することもできる。

今回の補充調査の対象としたのは、都市生活を経てはいるが現在は村落での生活を選択している者たちである。言い換えれば、トームスを主に飲む飲酒環境を含めた村落生活を選択的に希望した人たちである。その一方で、帰村せずに都市での生活を選んだドゥスン族、あるいはマレーシア半島部などで少数者として生きるドゥスン族も多数存在する。村落において一定の文化的同質性の中で生活するドゥスン族と、多文化的状況下でマイノリティとして生きるドゥスン族は、民族文化の象徴とされるトームスを、それぞれどのように理解し、消費し、楽しんでいるのだろうか。今後の調査分析の課題としたい。

注

- 1 「カダザンドゥスン族」とされる人びとのうち、サバ州の西部内陸地域に居住する人々は自らをドゥスン族と称し、「カダザン族」とは言語や習俗が異なっていることを主張している。本稿では、サバ州西部内陸地域に居住する「ドゥスン族」を自称する人々のみを指すものとして「ドゥスン族」の語を用いている。
- 2 壺に仕込み壺から飲む酒は、東南アジア大陸部から島嶼部にかけて広く分布している。吉田はその特徴について、①麴で酒をつくる、②壺で酒をつくる、

- ③飲む時に水あるいは湯を壺に注ぎ込む、④それを先端に穴またはスリットのある吸酒管で飲む、の4点を指摘している（吉田 2008）。
- 3 匿名を条件に調査に協力いただいたその華人商店での缶ビールの小売価格は、24缶セットでRM48.00（＝約1,350円）～RM65.00（＝約1,820円）となっている（2016年2月現在）。
- 4 マレーシアにおける酒類の法定購入最低年齢は18歳であるが、法改正により2017年12月から21歳に引き上げられた。本調査を行った2016年およびは補充調査を行った2017年9月は、法改正前であったことを念のため付言する。
- 5 リヒンを蒸留した酒。正式な酒造者としてのライセンスを持たない業者が密造し、空ビール瓶に詰めて安価に売られている。
- 6 20名の帰村の理由は、村での就農が11名、就職・転職活動中が4名、結婚が3名、失職が1名、親の介護が1名である。商品作物の価格上昇に伴い、KN村では2010年頃から若者の就農帰村が増えている。
- 7 イスラーム教国であるマレーシアは酒税が高い。さらにマレーシアの酒税体系においては、基本的にアルコール度数が高い飲料は、税率も高くなるよう設定されている。さらに、輸入された酒には別途課税される。そのため、外国産ワインは、国産ビールに比べて相対的に高価になる。
- 8 イバン族は、サバ州に隣接するサラワク州で最大の先住民族。ドゥスン族のトームス同様に米と餅麴を用いてトゥア（*tuak*）という酒を醸す。
- 9 ハラル（Halal）とは、イスラーム法で許された項目のことで、一般にはイスラーム教徒が食べることが許されている食材や料理を指す。

引用文献

- 第一マーケティング編 2014 『アセアン諸国における食品市場実態調査2014』、富士経済
- Department of Statistics, Malaysia, Sabah 2015 *Statistics Yearbook 2014, Saba, Kota Kinabalu*
- 三浦哲也 2008 「グローバルな飲酒文化の形成に関する文化人類学的研究—ボルネオ先住民社会の事例から」『たばこ総合研究センター助成研究報告』pp.13-30
- 三浦哲也 2011 「飛行機に乗りたがる妊婦—ボルネオ島先住民・ドゥスン族の女性の妊娠の社会性について—」『育英短期大学紀要』28, pp.47-56
- 三浦哲也 2012 「ドゥスン族社会における飲酒文化の

- グローカル化：物質文化の変容から』『育英短期大学紀要』29, pp.53-64
- 三浦哲也 2017a 「酒がつなぐ人間関係—東マレーシア・ドゥスン族社会の酒宴」『食をめぐる人類学—飲食実践が紡ぐ社会関係』pp.104-126, 昭和堂
- 三浦哲也 2017b 「マレーシア・サバ州・ドゥスン族社会における酒類販売の拡大とその影響」阿良田麻里子編『文化を食べる文化を飲む—グローカル化する世界の食とビジネス』pp.157-170, ドメス出版
- 山本博之 2006 『脱植民地化とナショナリズム—英領北ボルネオにおける民族形成』, 東京大学出版会
- 吉田集而 2008 「壺酒—東南アジア大陸部の酒」山本紀夫編著『増補 酒づくりの民族誌』八坂書房, pp.214-221

(2018年1月31日受理)